
超美人さんからの求愛

結城 綾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超美人さんからの求愛

【Nコード】

N1885X

【作者名】

結城 綾

【あらすじ】

息苦しくて目が覚めたらとんでもない美人にキスされて、その上なんとここは異世界だとか、しかもキスしてた超美人エルフがいきなり私にプロポーズ。

驚いていたら押し倒されて…って美人さんは胸がなかった。詐欺だあー！

トリップ恋愛ファンタジー。ダークエルフ×平凡大学生で、年下物になります。

R15程度の流血描写や軽い性的描写もあると思いますのでご注意ください

ください。

あらすじだけだとラブコメっぽいですが、実はかなりのシリアス系です。糖度だけは保証出来る…ハズ。

第1話（前書き）

（現在はこちらだけの発表作品で、自由気まま更新となります）

第1話

苦しい……。

息が……息が出来ない。

どうして？

どうしてこんなに苦しいの？

疑問に思ったとたん、ハッと目が覚めた。

なんだ夢か……。

現実じゃなことに安心したけれど、なぜだが息苦しさは変わらな
い。

それに動けなかった。

視界は真つ白なままで、まだ夢の続きでも見ているのだろうか？
そう思った瞬間、口の中で何か動いて驚いた私はいっそれを嚙
んでしまった。

「いつつ！」

目の前の真つ白な視界が、どんどんクリアになる。

いや、真つ白だと思っていたのは何かで、それが離れていったお
かげで視界は青空一色になった。

視界の片隅に人がいる。

私から離れていった何かとは人だったのだ。

少しだけ上半身を起こしてその人をちゃんと見てみる。

光に輝き流れるような美しい銀系の束としか思えない長い銀髪。
細められ、銀の長い睫が影を落とす瞳は金。

キメ細かそうな黄金のように光る褐色の肌。
計算されつくした完成した美の象徴がそこにある。

目の前で手の甲で口を拭っているその人は、見たことないほど美しい人だった。

多分、この時の私は口をぱっかり開けてその人に見とれていただろう。

だって、こんな美人な人が目の前で生きて動いているなんて信じられない！

び、美人すぎる！！

絶世の美女！

傾国の美姫！

目の保養。

福眼。

すっかり見とれていている私にその人がにっこりと微笑みかけてきた。美しい微笑みを向けられて私の心臓がバクバクし始める。

素晴らしい！

微笑みを1つ向けられただけで人をこんな幸せな気分させるとは……。

同性の私ですらこう思ってしまうほどなら、男だったら興奮し過ぎて鼻血ものだ。

誰だこの超美人さんは？

なんで私の目の前にいるんだろう？

そんな疑問を考えた時だった。

「あれ？」

超人さんの瞳は金色。
でも金色の瞳を持った国の人なんて知らない。
しかも超人さん……。
何か耳が……。
……長くて尖がつてる？

綺麗な銀髪から見える耳の形は映画で見たことがあった。

ファンタジー映画のエルフ族の耳とすごく似ている……。
もしかして映画の撮影でもしてるの？
そう思って辺りを見回せば、水平線まで続く平原のみ。
私はそのど真ん中に寝ていたらしい。

キョロキョロ辺りを見回していたら、いきなり視界が動いた。
背中に柔らかい草の感触がする。
どうやらまた倒れたらしい。
視界に超人さんが入ってきたかと思ったら、すぐに視界は超人さんだけに占められた。

切れ長の銀色の長い睫に縁取られた美しい金の瞳がすぐ目の前にある。
それに魅入られたように見てたら唇に柔らかい感触がした。

いくら私でも今何が起きているかぐらいは理解できる。
超人さんにキスされているのだ。
つてことはさっき苦しかったというのは超人さんにキスされていたから？

驚いて少しだけ口を開けたらすぐに生温かいものが入ってきて口

内を探り出した。

いやいやちょっと待って！

女同士でキスって、どうして？

超人さんの肩に手を置いて押し戻そうとしたら、胸が触られた。慌てて逃げようとしたんだけど、超人さんが上に押し掛かられていて動けない。

抵抗しようとしたばたするがまったく意味を成さず、手がするりと服の中に入り込み直接私の胸を触れた。

「んん！」

抗議の声を出したくてもキスされて声が出せない。

暴れてもびくともしなくて、やっとキスから開放されたと思ったらしいの間にか前がはだけており、胸の谷間にキスが落とされすぐに乳首に吸い付かれた。

女の人に胸舐められたあゝ！

ありえない！

これは夢なのか？

倒錯の世界！

これはいわゆる百合の世界ってやつ？

私は決して同性愛者ではない。

超人さんの下から抜け出そうとしたけれど、がっちりと捕まっ
ていて逃げられなかった。

何でこんなに力がるんだろ？

私の腿の内側に超美人さんの手が滑り込む。
暴れていてもスカートなので簡単に触れられてしまう。

「あっ！」

指がショーツに触れられ体が大きく痙攣した。

えっちの経験は少ないものの初めてじゃないが身持ちは堅い方だ。
それなのに初めて会った人に触られて感じている自分に驚いてしまっ
まう。

しかも相手は同性。

いや問題はそれだけじゃない。

ここは美しい青空が広がる野外。

こんな所でコトをいたしたら、それはつ・ま・り青姦！

それだけはわかっている。

なんとか阻止しなければ……と思うのに、パニックになっている
うちに、あれよあれよという間に服が脱がされていく。

この人脱がすの早っ！

このままでは本当に百合の世界に踏み込んでしまう！

それはマズイ！

慌ててる私の前で超美人さんが上着を脱いだ。

かなり前の開いたブラウスから超美人さんの肌が見える。
それを見て思わず目が点。

超美人なのに、超美人なのに……前がまな板のようにのっぺり……

いや、のっぺりではない。
すべすべに見えるお肌。
そしてそこには美しい女性には不釣り合いなまで筋肉が……。

無意識にその筋肉に手を伸ばして触れる。

弾力があるのに凄く硬い。

あんなに細身なのに……。

ダビデさんも真っ青の筋肉美。

感嘆しつつさわさわと触れていた手が包まれるように握られる。

「あ、ごめんなさい……」

「いいえ」

自分が許可もなく無断で触ったことに気づいて謝ると、優しく微笑まれた。

何か……超美人さんってすごくハスキーな声。

つてか、男の人みたいな声してる。

あれ？

男の人みたいなの声？

目の前をもう一度よく見る。

のっぺりとした筋肉質の胸から視線を下へ落とす。

見れば超美人さんはズボンを履いている。

そして股のところだけが不自然に盛り上がっていた。

……。

「えっと……あれ？」

「どうかしましたか？」

「あの……」

視線が下からそらせない。

「う……そ……だよね……」

「何がですか？」

「もしかして、あなた……男？」

非常に信じられないけれど、いや信じたくないけど、この超人
さんは……男！？

「ええ、そうですよ」

そう言って超人さんは微笑んだのだった……。

詐欺だあー！

第1話(後書き)

(2011/10/13修正)

第2話

目の前にいる超美人さんをまじまじと観察してしまう。
どこから見ても超美人。
とても男性だとは信じられない。

嘘だ！

詐欺だ！

こんなに美人なのに男？
もったいなさ過ぎる！

しかし、肌蹴た胸はなく、細い体には無駄のない筋肉でコーティングされている。

しかも下半身のズボンは変な風に盛り上がっていて、私は襲われかけていた。

「お、男……」

「ええ、私が男でなければ貴女を妻に出来ないでしょう？」

何か信じられないようなことをさらっと聞かされたような気がする。

「え？ つ、妻？」

「そうです。今貴女を妻にしようとしているじゃないですか」
「は？」

超美人さんは微笑んで私のショーツに手をかけてきた。

「いやいや、ちょ、ちょっと待った！」

「どうしました？」

私の言葉に手がぴたりと止まる。
意外と紳士なのか、素直な人だ。

上半身を起こして急いで広げられたブラウスをかき合わせた。

「えっと……ちょっと確認させてもらいますね？　まず、貴方は男
なんですよね？」

「ええ」

「……えっと、それから……私を奥さんにしたい？」

「そうです」

そこまで聞いて超美人さんが体を倒して寄ってきたので、慌てて
目の前に手を上げて静止のサインを送る。

「ま、まだです。まだ！」

「……わかりました」

制止した私をそんな残念そうに見ないで欲しい。

な、何だか、危機感を感じるのはなぜ？

あ、いや、食べられそうになってたんだから、危なかったことに
は変わらないんだった。

私は手をそのままにもう一度辺りを見回す。

「えっとここはいつたいてどこなんでしょうか？」

「ここですか？　ここはハーネスクイーンズ平原です」

「はーねすくいーんず平原？」

「バルト国東南、フメクスティア村を北に少し行った場所ですね」
「……うう、よくわかんないや」

とにかく私はバルト国にあるハーネスクイーンズ平原にいるのね。

「どうして私、こんなところにいるんだろ？」

「誰かに召還されたからでしょう」

聞いたことある単語に俯きぎみだった顔を上げる。

召還。

ファンタジーものの物語なんかでよく聞く単語だ。

私の知っている召還だと、意味は1つしか知らない。

「召還？」

「虹の光が見えましたから、間違いないと思いますよ」

「誰かって言いましたよね。誰に召還されたんでしょうか？」

「……さあ？」

あっさり言われて一気に脱力する。

「どうしたら還れるんでしょうか？　もしかして……還れない……
とか？」

一番聞いてみたくて、一番怖い質問を試してみる。

ビクビクしている私を超美人さんは静かに見つめていた。

「いいえ、召還した者なら還せますよ」

「そ、そうなの？　なんだ……。良かったあ」

還れると聞いて安心してしまう。

「こういう物語でよくあるのは還れません……だもんね。」

「じゃあ、私を召還した人ってどこにいるんですかね？」

「私にはわかりませんね」

「え？ あれ？ 私を召還した人じゃないと還せないんですよね？」

「はい」

「……その召還した人がどこにいるのかわからない？」

「そうですね」

「……ちなみに見つける方法なんてものは」

「ないですね」

一刀両断。

袈裟懸けに斬られて、私はがっくりとうな垂れる。

つまり私を召還した者を探さないと元の世界には還れないってことだ。

「別に問題はないでしょう」

「問題ありますよ！ おお有りでしょう。還れなかったら困ります」

「なぜ？」

「なぜって、逆にこっちが聞きたいよ。もー」

言葉が通じない。

いや、ちゃんと言葉は通じてるんだけど、会話が通じないと言っべきか。

「貴女は私の妻になるのですから、還れなくても別に問題はないでしょう？」

「は？」

言われた言葉に気づいて、そう言えばさっきもそんなこと言われたことを思い出す。

「なんで妻？」

「そう決めたからです」

「いやいや、意味わかんないですから！」

知らない世界にいて、いきなり妻にするって言われて、はいそうですかって言えるもんか。

意味が本当にわかんない人だ。

超美人なのに……。

「だいたい、そんなこといつ決めたんですか」

半分やけっぱち。

半分八つ当たりに近い気持ちで聞いてみる。

そんな質問にも超美人さんはさらりと答えてくれた。

「私、この近くに住まいをもっているんです。用事でここを通ったら召還の光が見えて近づいて見れば貴女がいたというわけです」

「それで？」

「見たら可愛かったので妻にしようと思いました」

まるで今日の夕飯のおかずを決めたみたいに妻に決めたと言われている気分だ。

しかもさらっと私のことを可愛いと言ってくれたけど、私はごくごく平凡な凡人顔。

ここまでの美人に言われると逆に恐縮してしまう。

「決めたって……私はこの世界の人間じゃないんですよ？ それに……」

言いかけた途中で口を閉じる。

ちらりと超美人さんの耳を見てしまった。

これが王道なファンタジーなら超美人さんはエルフってことになる。

「それに？」

「種族が違うんじゃない？」

確信が持てなくてだんだんと声が小さくなってしまふ。

「ああ、そうですね。私は見ての通りエルフ族ですけど、貴女と交配するのに問題ありませんよ」

「こ、交配……」

あけすけな言葉に硬直してしまふ。

えっちじゃなくて交配になるのかぁー。

意味は一緒でもちよつと嫌だなそれは。

「エルフと人間との間に生まれたハーフエルフがいます」

「もしかして貴方がハーフエルフ？」

聞いてみると、超美人さんは少しだけ瞳の奥を翳らせた。

もしかして聞いてほしくなかった質問だったのだろうか？

「この褐色の肌とこの髪を見ればわかるように、私はハイエルフと

「ダークエルフのハーフになります」

聞いたことはあるものの意味がわからない言葉だったが、超人さんの様子からこの話は掘り下げるとはやめることにした。もっと基本的な質問をすることにする。

「えっと、妻になるかどうかはちょっと置いておいて、名前、教えてもらってもかまいませんか？」

「名前……。私はジェスディラッド・リンデールです」

教えてもらった名前はちょっと言いづらい名前だ。そんな私に気づいたのか超人さんが微笑む。

「ジェスって呼んでください」

「あ、はい。私の名前は響　若菜です。こっち風で言うと、ワカナ・ヒビキになるのかな？」

「ワカナ……。名前も可愛い……。」

まあ、確かに名前は私も可愛いと思うけどな。

「ワカナ……。」

なんだか甘く名前を呼ばれ、ジェスが近づいてくる。

「ま、まだ、ストップ！」

慌てて手で近寄れないようにブロックすると、ジェスはがっかりしたような顔で体を引く。

この人、なんでこんなにえっちする気マンマン？

これだけの超人さんなら相手は選り取り見取りでしょうが。
なんで私に迫ってくるの？

「何で迫ってくるんですか」

「交配したいから」

「」……」

ストレートすぎるお言葉。

変に気が抜ける。

「何か……交配って言い方嫌です」

「嫌？ じゃあ何て言えばいいのでしょうか？」

「……えっちで」

「えっち？」

聞かれてコクコクと頷く。

こんな美人に繰り返されると何だかこっちが恥ずかしくなってしまう。

なんでこんなくだらないことを私は相手に言ってるんだろうか？

「では、えっちしましょう」

言っている言葉が不釣り合いなほど優しい微笑むが向けられる。

その顔で誘わないで欲しい。

うっかりうんって頷いてしまいそうで怖いよ。

「だ、ダメです」

「……私が嫌ですか？」

すんごく悲しそうな顔になるジェスに困ってしまっ。

そんなに悲しい顔するのはやめて欲しい。
胸がズキズキしてしまっ。

「嫌とかじゃなくて、私の世界じゃ、えっちはしばらくお付き合いしてお互いのことが分かり合えたら両方が同意してからえっちなものなんです」

「……それはつまり文化の違いですか？」

「そうなんです！」

ちょっと違うけれど、もう面倒くさくなってしまったのでそのままにしてしまっ。

「そのお付き合いとはどれくらいするものなのですか？」

「え？ うーん、個人差だらうけど……」

考えている間、いつの間にかジェスがすぐ側まで近づいてきていた。

「どうせ妻になるのですから、そんなことは飛ばしてしまいましょっ？」

そう言って私のブラウスに手をかける。

「いやいや、だめ、だめです！ だいたいなんで妻になることが決まってるんですか！」

「私がそう決めたからです」

服をむしり取られそうになって慌てて這いずって逃げる。

まったくもって意味のわからない理論を述べられても納得なんてできるわけがない。

こんな超美人な旦那さんなんか嫌だよ。

「お互いのことよく知り合ってから夫婦になるか決めましょう！
ね？」

その場の言い逃れのようなものだったけれど、ジエスは服にかけていた手を止めてくれた。

「……他の男を見たりしないって約束できますか？」

「する、する！」

「わかりました」

そう約束をするとジエスは素直に身を引いてくれた。

第2話(後書き)

(2011/10/13修正)

第3話

ジェスは強引だけど私が待つてっぺ言え、ちゃんと待つてくれる。

けして無理強いすることはない。

そっうのは好感が持てた。

とりあえず、目が覚めてすぐにありえない事態のおかげで異世界にいることには混乱しなくて済んだ。

思考はちゃんとしているので、もう一度情報を整理した。

必死にふわふわとしている記憶を掘り起こす。

私は昨日何してた？

昨日は就活で大学に行つて、夜はエントリーシート書いて……、それで寝たんだよね？

で、目が覚めたらバルト国にあるハーネスクイーンズ平原にいた。それは誰かにここへ召還されたせいで、還るには召還した者に還してもらえばいいんだけど、その召還した人が誰かわからない。

しかも探す方法もない……と。

召還された私を見つけてくれたのはエルフ族のジェスで、なんでだか私を妻にしたがつてる。

でも私は元の世界に還りたいので妻にはなれない。

大きな問題はそれだけじゃない。

召還した者を探すにしても私はこの身一つ。

お金も住む場所もない。

衣食住がないのだ。

自分勝手な都合で言うなら、妻にはなれないけどジェスに助けてもらいたい。

さて、どうしたものかな……。

私が悩んでいる間、ジェスは目の前で座ったまま大人しく私を見ていた。

青空をバックに、輝く銀髪が草と同じように揺れている。
めちやくちや幻想的で美しい。

ちゃんと見れば、肌蹴た服の間から見える筋肉だけではなく、シヤープさを感じる骨格や広めな肩幅など、女性として見るには少しだけ無理のある体系をしていた。

冷静に見れば超美人な男性かな？ って疑問に思うくらいだった。

「ね、ジェスさん」

「はい。何でしょう？」

「身寄りのない者が身をよせるような所ってここにありません？」

とにかくこの世界での生活基盤を作らなければならぬだろう。

私を召還した者を探すにしても、どれだけ時間がかかるのかわからない。

また、探す方法が本当にないのか調べてみたいし。

それには行動の中心となる場所が欲しい。

「少し大きな街に行けば、孤児収容施設のようなものがありますが

……」

「大人は入れない？」

「……いいえ、大人でも入れます」

大人でも入れると言うジエスの言葉に希望が湧いてくる。
良かった。

いきなり見知らぬ場所に放り出されて何とかしろって言われても
さすがに厳しい。

とりあえず衣食住の保障だけでも確保できるのは大きかった。

「すみませんが、私をそこへ連れて行ってもらえませんか？」
嫌です」

見えてきた希望に嬉しさがこみ上げる私に、ジエスは首を振って
速攻断った。

な、なんで嫌？

そこへ連れて行くのが嫌だとか？

「ど、どうしてです？」

「そんな所へ行かなくても、私の妻になればいいじゃないですか」
それは……」

そう言えば妻になって欲しいと言われていたことを思い出す。

気持ちは嬉しいけど、いきなり妻になって欲しいと言われても…

…。
それに自分の世界に還りたいし……。

「私がダークエルフだから嫌なのですか？」

「種族が違うからとかじゃないんです。やっぱり元の世界に還りた
いから……」

「……そうですか」

私の言葉にジェスは一瞬だけ悲しそうな表情を浮かべた。

「わかりました。では、一番近い街にある孤児収容施設まで送りま
すよ」

意外とあっさり申し出てくれて驚く反面、やっぱり嬉しくなっ
てしまう。

お礼を言っていると、ジェスは立ち上がって左手を差し出してきた。

「いきなり今日これから出発することは出来ないので、とりあえず
私の家に来てください」

ジェスの家に誘われ、むくむくと警戒心が湧き上がってくる。

男の家に連れ込まれ、美味しくいただけられてしまうということは
ままあることだ。

警戒してしまうのは仕方のないことだろう。

そんな私に気づいたのか、ジェスは手を差し出したまま少しだけ
困ったように苦笑する。

超美人さんはどんな表情も美しいと創作なんかで読んだけど、本
当に美しくて様になるなあ。

「貴女の嫌がるようなことは決してしないと、女神インフリーリア
に誓いますよ」

女神インフリーリアというのが誰なのかはわからないけど、神様
に誓ってってヤツだったことはわかったので、私はジェスの差し出
されている手を取った。

引つ張られて立ち上がると、ジェスの顔が少しだけ見上げるほど高いことに気づく。

180センチはゆうに超えているだろう。

髪もすごく長い。

膝裏までさらさらとした髪が揺れている。

思わずため息が出てしまうほど完璧な美だった。

見とれていた私にジェスの手が伸びてきて、私は過剰反応してしまい飛び上がって驚いてしまった。

そんな私にジェスは少し困ったように微笑む。

「服を直そうと思っただけです」

「あ、ご、ごめんなさい」

そう謝るとジェスは首を振って私のブラウスのボタンを丁寧にとめ、服のシワを伸ばすついでに付いていた草なんかを払ってくれた。最後に手櫛で髪を整えてくれるとにっこりと微笑む。

「綺麗になりました」

「ありがとう……」

「いいえ、こっちはですよ」

手をジェスに握られ、引つ張られる。

家に案内してくれるらしい。

歩きながらすぐ横にいるジェスをもう1度見る。

ジェスは今まで純粹な好意しか示していない。

それが私を酷く戸惑わせる。

私は元の世界で裏切られてばかりいた。
恋人も家族ですら……。

当然、出会ったばかりのジェスの好意も信じることが出来ない。
もちろんジェス以外の人も同じだ。

誰も信じられないなら、誰でも一緒だ。

ジェスが裏切りを見せるまで利用すればいい。

そんなことを考えながら私はジェスと一緒に歩いた……。

第3話(後書き)

(2011/10/13修正)

第4話

少し歩いた所にジエスの家はあった。

ジエスの家は大きな泉のすぐそばにある大樹に作られたツリーハウスだった。

かなり大きくずいぶん立派で驚いてしまう。

「ここに家族と住んでいるの？」

「いいえ、一人で暮らしています」

「両親は？」

私にとってこの質問はごく普通の世間話のようになつてもりだった。

しかし、振り返ってジエスの瞳を見た時、胸がズキッと痛み質問したことを後悔した。

それほど苦しそうな瞳をしていたのだ。

そういえば、さっき、自分がハイエルフとダークエルフのハーフである時も瞳が翳った。

この手の質問は地雷なのだろう。

慌てて質問を取り消そうとした私の口をジエスの人差し指が押さえる。

「気にしないでください。ワカナは事情を知らないのですから、その質問は当然です」

「ジエスさん……」

「先ほども言いましたが私はハイエルフとダークエルフとの間に生まれた子です。ハイエルフとダークエルフはエルフの中でも対極的な存在でお互い対立し合っているんです。ワカナは魔法を知ってま

すか？」

「うん」

「ハイエルフの魔法属性は光、ダークエルフの魔法属性は闇。この2つは対極の存在であり、けて交わることが出来ません。ダークエルフの父は力試しにハイエルフの母に戦いを挑み、結果母は敗れました。そして母は父から辱めを受け、私が生まれました」

「え……」

衝撃的な話に言葉が出なくなる。

それじゃジェスの存在って……。

そこまで考えて思考を止める。

そんなことはジェス自身が一番わかってるはずなのだ。

「私がハイエルフの姿をして生まれて入ればもつと違ったかもしれないませんが、あいにく両方の特徴を継いでしまったようで私は母に捨てられてしまいました」

「ジェスさん、もういいですから……」

「……ワカナ、貴女がそんなに苦しそうな顔をする必要なんてないんです」

救い上げるようにジェスの両手が添えられ、優しく顔を上げさせられる。

「私を拾ったのは人間です。力を失いかけていた魔術師で高名な占い師の老婆でした。彼女は人里から離れ残りの余生を静かに暮らしたいと望んだ人でした」

目の前にある金の瞳がその時の記憶をさ迷っているのか視点が遠くなる。

その老婆との記憶はけして辛くはなかったらしく、少しだけ穏や

かな表情に変わったことでほっとしてしまっ。

「彼女は私にあらゆることを教えてくれた人です。家族であり、師でもあった。……そして私に何を恨むのは時間の無駄だと教えてくれた人です」

「……」

ジェスの言葉が私の心を鋭く突き刺す。

私はゆっくり目を閉じる。

誰かを恨んでも意味などない。

それでも恨まずにはいられなかった。

心が痛い……。

自分だけが辛いなんて不公平だ。

相手の不幸を望まぬにはいられない。

そう思う気持ちを止められなかった。

じくじくと痛む胸が今でも苦しさを訴えてくる。

不幸になればいい。

辛くて苦しんだら嬉しい。

そう思った時だった。

いきなり唇に暖かな感触がする。

「ん……」

目を開ければ視界いっぱいジェスの顔があった。驚いて胸を押すとあっけなく離れることが出来る。

「ちょ、ちょっといきなり何を」

「私の前で目を閉じたのでキスしていいのかと思って」

「いやいや、人に許可なくキスしたらダメです！」

「そうですか……、わかりました」

ジエスは聞き分けだけはいい。

目を閉じたらキスしていいって……これじゃ寝てるだけでもキスしていいことになってしまう。

そう言えばさっきも息苦しくて目が覚めた時もジエスは私にキスしてたな……。

「キスする時は私の許可を取ってからにしてくださいね？　しゃべれないからとか、寝てるからとかでも許可がなければ絶対にしちゃダメですからね！　あ、あと事後承諾もだめですから」

「……わかりました」

先手を打って念には念を押すとジエスは残念そうに了承する。

言っておいて良かったかも……。

ジエスのあけすけな好意に困ってしまう。

「そういえば、ジエスさんっていくつなんですか？」

「私ですか？　21歳になります」

25くらいかな？　って思ったんだけどな……。

ずいぶん落ち着いているせいなのかとても年下には見えない。

「ワカナはいくつなのか聞いてもいいですか？」

「私？　私は22歳ですよ」

にっこりとジエスに微笑まれる。

私は年相応に見えるはずだけど、この世界ではどうなのだろうか？

「年下の夫は嫌ですか？」

「え？ い、嫌じゃないけど、その話はまだ持続してたんだ？」

「人は突然気の変わる生き物ですから……、私はいつ気が変わっても歓迎ですよ」

両手を握られ嬉しそうに微笑まれると罪悪感を感じる。

気は…… 変わらないだろう。

元の世界に還りたいし、もう…… 恋はいい……。

「……それは置いておいて、家を案内してくれませんか？」

「ああ、そうでしたね。すみません。どうぞこっちはです」

手を引かれ、階段を上がる。

ジエスがドアを開けて私を先に入れてくれた。

「うわ〜」

思っていた以上の素晴らしさに感嘆の声が出る。

ウッドハウスの中は何もかもが木で作られていた。

あちらこちらで植物模様の刺繍がされた布がふんだんに使われ、落ち着いて居心地がいい。

高い場所にある為、風通しも良くいい風が室内を通り過ぎて行く。

「お腹はすいていませんか？ きのこのスープがあるんです。少し

だけいかがですか？」

「あ…… ちよつとだけ」

「そのテーブルに座っててください」

「あ、はい」

言われた通り座る。

ジエスは広い室内を横切って、土が敷いてある一角に進む。

わざわざ室内に土を持ち込んだらしく、土の上に薪が置いてあって、その上に陶器製のなべのようなものが下げられていた。

そこは料理するキッチンのような役目の場所なのだろう。

目の前にふわふわの真っ白なパン。

木のコップには何かの果物みたいな甘い香りのものが入っている。

スプーンまで木で出来た物だった。

金属類はないのだろうか？

辺りを見回すが、そういったものは見られなかった。

「今朝の残りで申し訳ないのですが、どうぞ」

「ありがとうございます」

さっそく口に運ぶと、きのこのクリームシチューみたいなもだった。

パンは蒸しパンみたいで少し甘い。

「美味しい……。これ全部ジエスさんが作ったの？」

「ええ。お口に合って良かったです。私、家事は何でも出来るんですよ?」

どうですか?と言わんばかりの言葉に苦笑してしまう。

いくら私でも言葉の真意は伝わっている。

でも判らない振りをするしかない。

「すごいですね!」

私もにつこり笑ってとぼける。

そんな私の反応にジエスはがっかりしていた。

そりゃ夫婦になるなら、夫が家事を出来ないより出来るほうが助かるけれど、でもジエスは違う世界だ。

恋愛対象外だし、恋人なんて欲しくない。

胸に出来た空洞が痛む。

私は思考を目の前にある食事に意識を切り替える。

とりあえず言葉は通じるし、食事もまったく問題はない。

それだけでもずいぶんと助かった。

言葉も通じない、食事もダメとなればどれだけ生活に負担があるだろう。

しかもジエスが助けに来て本当に良かった。

それから後はジエスにこの世界のことや、色んなことを教えてもらった。

順応力があって諦めの早いのが私だ。

還ることは諦められないけれど、この世界に召還されたことは受け入れることが出来た。

今の目標はなんとしてでも召還した人を見つけ出す事。

私はそれだけは決心した。

第4話(後書き)

(2011/10/13修正)

第5話

ジェスの住む場所は本当にいい所だった。

自然に囲まれているとかじゃなく、静かでなんとなく時間がゆっくり流れるような気がする。

疲れた気持ちが少し癒されるような……優しい空気。

そばにいるジェスの存在もあるかもしれない。

何だかんだと言ってはすぐ私に触れるもののジェスは約束を守ってくれているらしく、キスしようとしたり押し倒したりはしない。

ジェスの女性のようにも見える容姿のせいなのか、触れられても抵抗感がないのが困りものだ。

まあ、逆にそれが異性として意識しづらい要因でもあるのだけだ。

夜寝る為の部屋はジェスを育ててくれたというおばあさんの部屋を貸してもらった。

ベッドはふかふかで寝心地はいいんだけど、部屋にはドアがなく、布1枚が入り口に掛けられているだけなので夜這いし放題になっているのが気になっていたのだけど、そんなのは最初だけだった。

ジェスは布の向こうで声をかけるだけで、けして部屋に入ってくることはしない。

本当に律儀な性格だ。

育てたおばあさんがジェスをそういうふうに育てたんだろう。

ジェスは自分で言うように何でも1人で出来る。

話を聞いてみると15歳の時におばあさんが亡くなってそれ以来一人で生きてきたらしい。

「やっぱり寂しかった？」

「そりゃ……でも、私はハイエルフ族にもダークエルフ族にも受け入れることの出来ない存在です。かといって他のエルフ族にも無理でしょうしね」

「人間と一緒に住むことは考えなかったの？ だって、ハーフエルフが生まれるくらいなんだしやっていけないわけじゃないんでしょ？」

「ええ、ですが、アンネにここから出てはいけないと言われていましたから」

アンネとはジエスを育てたおばあさんのことだ。

「何か理由があるの？」

「私の存在は至宝なんです。この美しさを見ればわかりますでしょう？ だからここから出てはいけないんです」

「そ、そうなんだ……」

確かにジエスは超美人さんだ。

男の1人や2人くらいは軽く惑わせることが出来そう。でもそれを自分で言っちゃおう？

……ジエスつてばナルシストの素質もあつたのね。

「そう言えば出て行くとかで思い出した！ いったい何時になつたら街に連れて行ってってくれるの？」

「あ、忘れてなかったんですね」

「ちょ……、あたりまえです！」

うやむやにするつもりだったのか……。

「……さっきも説明しましたが、街に行けば私が狙われてしまうの

です」

「あゝはいはい。じゃあ、1人で行くから地図でも書いてよ」

どうせ私は狙われるような容姿してませんよ。

半分イジケ気分で、ジエスに答える。

「今この国は隣の国と戦争をしています。一番近い街ももう安全とは言えません。戦争が終わるまでここにいた方が安全なんです」

戦争？

世界のどこかで戦争しているのに、日本人の私にとって戦争はテレビで見るだけでしかない。

平和にしか見えないのにここも戦争をしていると言う。

本当なのだろうか？

「どうしてここにるのが安心なんですか？」

「ここは神の森だからです。どの国にも必ず神の森があり、神の森を争いごとで汚せば国が滅ぶとされているんです。例え自国の神の森じゃなくてもね」

「つまり聖域つてことが……」

いちごみたいな甘酸っぱいジュースを一口飲んで喉を潤す。

お昼はピクニック気分になりたくて、今日は外で食べている。

もちろん全てを用意したのはジエスだ。

どんなに遠慮してもジエスは私をお姫様かのように世話してくれる。

「でも戦争がいつ終わるかわからないんでしょ？」

「……ええ、そうですね」

「戦争が長引いたらその分だけ召還者を探すのに時間がかかる。と

ても終結するまで待てないよ……」

「……」

本当に戦争しているのかわからないけど、戦争なんてものがすぐに終わると思えない。

「ここが安全であつても、ここにいたらいつ還れるのかわからなくなつてしまう。」

「……還つたとして待っている人がいなくても、見知らぬ世界に1人よりずっとマシだ。」

「そんなに還りたいのですか？」

「……当然だよ」

「……」

「ジエスはどうしてこんなにも私をそばに置いておきたいのだろうか？」

「寂しいから？」

「私も寂しいけれど誰も側にいて欲しくない。」

「今は自分のことで精一杯で誰かの気持ちを考える余裕すらなかった。」

「でも、優しくされるのは嬉しい。」

「向けられる優しさが打算だとしても、ないよりはずっといいから……。」

「わかりました。明後日出発しましょう」

「ジエスさんも一緒に行つてくれるの？」

「ええ、ワカナを一人にするわけにはいきませんから……、止めても無理にでも行くつもりなのでしょう？」

「……ごめんなさい」

ジェスがここから出たがっていないことはわかっている。
本当は1人で行くべきなんだろうけど、やっぱり1人で行くのは不安だ。

「とりあえずバルト国と戦争している西にあるリキシス国は避けるとして、南にあるエジルオン国を目指しましょう。あそこはとても大きな国で1000年や2000年じゃ倒れたりしないでしょうしね」

「ありがとうございます」

「いいえ……」

次の日、ジェスは朝からばたばたと何やら忙しそうだ。
聞いてみれば出発の準備に忙しいらしい。

「半刻ほど出かけてきます。一人で待つてもらえますか？」

「どこに行くんですか？」

ここに一人で残されると聞いて不安からついマントを着ているジェスの側に行ってしまう。

「近くの村に行って馬とお金を調達してきます」

「お金？」

「ええ、ここにいるとお金はあまり必要ありませんが、出るとなればそれなりに必要になるでしょう？」

そう言われてお金がかかることに初めて気づいた。
ジェスは私の為にお金を作るうとしている。

「……少し時間がかかるかもしれないけど、ちゃんとお金は返すか

「ら

「いいんですよ。気にしないでください。さつきも言いましたがここではお金なんて必要ないのです。返す必要なんてありません」「でも!」

返さなくていいと言われたって「はい、そうですか」「なんて言えるわけない。

ジエスはそんな私の腕を掴んで自分の胸の中へと引き寄せる。

「ワカナと少しでも一緒にいられるのなら、お金などいくら使ってもかまいません」

優しく抱きしめられて少しだけどきどきしてしまっ。

私の頬に綺麗な銀髪が当たっていて気持ちがいい。

私との時間の為ならお金を使っていいなんて……。

どうしてジエスはこんなに優しいんだろう。

私だけ?

それとも誰にでも?

ついそんなことを考えてしまっ。

「一人で不安でしょうが、ここに結界を張っておきますから誰もここには入ってこられません。安心して待っていてください」

「うん……気を付けて行って来てね」

「ええ」

少しだけ私を強く抱きしめるとジエスは離れて家を出て行っ。私のせいでジエスに迷惑をかけている。

元の世界に戻れるようになったらジェスに何か恩返しをしたい。
私はツリーハウスの窓からジェスの背中を見えなくなるまで見送
った……。

第5話(後書き)

(2011/10/13修正)

第6話

ジェスが戻ってきたのは陽が暮れかかっている頃だった。誰かと一緒にいるのか、ジェス以外の男の人の声が聞こえる。

迎えに出るべきか悩んでいるとジェスが家に入ってきた。

「お帰りなさい」

「……ただいま」

「誰か来てるの？」

「ええ、馬を売ってくれる人なんです」

マントを脱がないでジェスは部屋の中を歩き回り、あっちこちの引き出しを開けては何かを出していく。

「何してるの？」

「しばらくここを離れますからね。食材や日持ちのしないものなんかを引き取ってもらおうですよ」

そつと窓から下を覗くと、馬らしい4本足の生き物が2匹と、その手綱を持つ中年の男の人が立っていた。

あの人引き取ってくれる人なんだろう。

何か、そわそわしているように見える。

「ワカナ」

「え？」

「窓から顔を出さないように注意してください。結界から出ると姿が見えます」

「……」

この家に結界なんて張っているんだ……。

ジエスはあの男性に私の姿を見られたくないのだろう。
私はジエスの言葉に素直に従った。

ジエスは2回ほど行き来して荷物を運び出す。
何となくなだけど運び出す荷物が多いような気がする。

私の我俣に付き合う為にジエスにはどれだけ迷惑をかけるのだろうか？

一人で行くと言える勇氣は今の私にはない。
迷惑でもジエスに面倒を見てもらわなければ私は何も出来ないのだ。

私はジエスの望んでいることすら叶えてあげられない。
なんて不公平な関係なんだろう……。

ジエスは全てを運び出したらしく、小さな袋を持って戻ってきた。
小さいわりに重そうで、袋の布が張っている。
たぶんお金なんだろう。

「お待たせしました。これで準備は殆ど終わりです。明日は出発しますから早めに休んでくださいね」

「……あの」

何か言いたいのに言葉が浮かばない。
ありがとうと言いたいけれど、それだけじゃ申し訳なかった。
そんな私にジエスは優しく微笑む。

「話には色々聞いていますが、私は生まれてからこの森から出たこ

とがないのでとても楽しみです」

ジェスの優しい言葉が胸に痛みを生む。

私の気持ちを気遣っての言葉だということはわかっている。
言わせているのは私なのだ。

「……そうだね。私も知らないことばかりだから楽しみ」

「施設まではかなりの距離がありますから、たくさん楽しみましょ
うね」

「うん」

私はジェスの優しさに甘えていた。

何も知らないということがどれほど危険なことが理解出来てな
ったのだ。

私の無知がジェスを殺すことになるなんて、この時の私は何もわ
かっていなかった……。

次の日、早速出発した。

馬は1頭しかおらず、私が馬に乗せてもらってジェスが手綱を引
きながら歩く。

私だけ馬に乗るのは申し訳なくて遠慮したんだけど、歩きなれな
い私が歩いてもすぐにバテてしまうということで馬に乗せてもら
うことになった。

天気も良く、気候も温暖。

それなのにジェスは昨日のフード付きのマントだけじゃなく、何
枚も重ねて着ているせいでジェスの顔が殆ど見えない。

「暑くないの？」

「暑いですよ。ですが私の容姿が見えると大変ですから」

ナルシストかと思うような言葉に適当に返事しようとしてあることに気づいた。

確かに、誰だってジエスを見たら見とれるだろう。それほどジエスの容姿の美しさは半端じゃない。

あんまり考えたくないけど、ジエスの美しさを独り占めしたいと思う輩がいなくても限らない。

またジエスを観賞用の商品になると目をつける犯罪者もいるかもしれない。

そう考えるとジエスが自分の容姿を隠すのも頷ける。

「肌くらい見えても大丈夫じゃないかな？ 暑くて倒れないか心配だし」

「フードをかぶっているのに他の肌を見せるのは不自然です。暑かったらちゃんと休ませてもらうので大丈夫ですよ」

申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

フードのせいで顔半分が見えない。

ジエスの表情は見えなくても、きつといつものように優しい笑みを浮かべているのだろう。

他愛もない話を続けながら、陽が暮れるまでには小さな町に入り宿を取った。

部屋はちゃんと2つ。

小さな町だからなのかもしれないけれど、すれ違う人の中に、エルフの姿は見かけなかった。

ジェスはエルフは人のいる場所に出てこないのかと聞いてみたが、そんなことはないらしい。

大きな街に行けば、エルフが住んでいると聞いたと教えてくれた。

宿の下は食堂になっており、夕食はそこで食べるのかと思ったけれど、ジェスは食事を部屋に運ばせた。

食事くらいはマントを脱いでゆっくり摂りたいらしい。

一人では寂しいからと、私もジェスの部屋で一緒に夕食を食べている。

食事だけど、見た目は素朴な家庭料理って感じなのに味はすごく濃い。

無性に喉が渴く。

「濃いですか？」

「う、うん」

「ふふ……。確かに濃すぎますね。話に聞いてはいましたが、これほど濃い味付けだとは私も思いませんでした」

くすくすと笑いながら、ジェスは料理をつつついている。

「……小さな町なのに意外と活気があるんですね。こんなにたくさん人がいるのが不思議です」

部屋から窓の外を見下ろすジェスはとても楽しそうだ。

「森から出たことないって言ってたけど、人間とは関わりがあったんでしょ？」

「ええ、アンネは呪術の道具や薬を作っては近くの村の人に売っていましたが……。昨日来た人もその一人です」

「じゃあ、お金を作るって言ってたけど、昨日の人にそういうのも売った？」

「ええ、薬など置いておいても仕方ないですしね」

ジェスは自分の物を売ってまでお金を作って私を施設まで送ってくれている。

どうしてこんなに良くしてくれるのかと、つい考えてしまう。

愚かしい記憶が甦る。

今までは何の疑問もなく人の好意だと思ってきたものを素直に感受してきた。

その結果がどうなった？

人は見返りがなければ何もしない。

ジェスも私に何か求めているんだろう。

言われて差し出せるものならいいのだけれど……。

私はジェスに良くしてもらいながら、心を許すことが出来なかった。

第6話(後書き)

(2011/10/13修正)

第7話

初日は神の森から一番近かった小さな町ケセナで宿泊し、次の日、またすぐに出発した。

景色はテレビで見るとような外国ののどかな田園風景が続く。

私は馬に乗せてもらっているが、ジエスはその馬の手綱を引いて徒歩だ。

本人は歩くことに慣れていっていると言っていたけれど、自分だけ馬に乗っていることがすごく申し訳ない。

時々ジエスの様子を伺うが、疲れている様子はなく私は戸惑ったまま馬上の上で揺られていた。

「ジエスさん、次の町までどんくらいあるの？」

「夕方までには次の町に着きますよ。疲れましたか？」

ジエスは常に私のことを気遣ってくれる。

森を出たことのないってことはジエスだって旅をするのは初めてなはずだ。

慣れない上に私の世話までして疲れないはずがない。

「私は疲れてないけど、ジエスさんは休憩しなくて平気？」

「大丈夫ですよ。疲れたらちゃんと休ませてもらいます」

「本当にちゃんと休んでね？」

「ええ」

ジエスが少し顔を上げると上に曲湾しているスツと通った細めの唇がフードから覗く。

笑っているのだろう。

「この国は隣国のリキシス国と戦争してるんだよね？ どうして戦争なんてしてるのかな？」

「バルト国は温暖な気候に恵まれ、地形的にも緩やかな土地が多いんです。そのせいか農業が盛んなのですがそれだけなんです。逆にリキシス国は地形に山や荒地が多く食料不足なんです。でも鉱山が多く宝石や鉱石などの採取が豊富でそれを輸出して栄えているのです」

「つまりお互いない物を持っているってわけね？」

「ええ、ですがバルト国の方が歩が悪い。鉱物は腐りません。食料は消耗品であり、たくさんあったとしても腐敗していくだけです。しかもリキシス国の鉱物は他の国でも需要がある。それなのに我がバルト国の食料はリキシス国にしか需要がない。よって我がバルト国はリキシス国を属国にしたかった……。そうして戦争が起きたのです」

「……」

ゆつくりと馬上からのつどかな田園風景を見渡す。

とても今戦争が起きているとは思えないほど静かで平和だ。

「目指しているエジルオン国はリキシス国の下に位置します。リキシスの国境に近くなれば戦争に巻き込まれる可能性が出てきます。かといって遠回りに行こうにも連なる山脈が邪魔で通れない。多少危険でもリキシスの国境を通らなければなりません。今争っている場所が近くないといいのですが……」

心配そうな声が少しだけ不安を感じさせる。

戦争がどれくらいの規模でどのようなものなのか私にはわからない。

この国が戦争しているという実感はなかった。

「どうして人は自分が持っているものだけで満足することが出来ないんだろうね」

「ワカナ？」

「ううん、何でもないよ」

町は旅人が1日徒歩で進める距離で点在している。

おかげで野宿はなく順調に進んでいた。

出発して7日目。

ほぼ一日中ジェスと一緒にいるせいで毎日色々なことを話していた。

そのほとんどはこの世界での常識についてだが、時々お互いのプライベートな話もしていた。

それでわかったことなのだが、ジェスの知識の殆どはアンネからもたらされたもので経験によって培ってきたものではない。

人との接触が極端に少なかったせいも、ジェスは純粋で優しすぎる。

そんなジェスをかっつての自分に重ねてしまっているのか私はジェスの未来がが気になってしまう。

人を疑うことはけしていいことではない。

それでも人を平気で騙す人がいるのだ。

自分の利益だけの為に人を傷つけても厭わないという人間が……。

私は宿屋の部屋で窓の縁に腰掛け、涼しい夜風を感じながら静かに目を閉じた。

ジエスは隙あらばアプローチしてきて、いつの間にかそばにいて手を繋いでいる。

困るのは咎めようとしてジエスの優しい笑みを見ると何も言えなくなってしまうことだ。

純粋なジエスを拒否することは私には出来ない。

「なんだかな……いつまでも傷を抱えてる自分がホント情けなく感じる。ジエスは容姿も心も美しくてすごく眩しいよ……」

最初は女性と見まがうほどの美しさに気を取られていたが、今では内面からにじみ出る美しさを感じていた。

そんなジエスに自分が妻として請われていることに戸惑う。

ジエスのとって自分に近い年齢の異性にかたまたま私だったせいで私を好きだと思い込んでいるんじゃないだろうか。

平凡な容姿。

特別何かに秀でてしているわけでもない。

それどころか今の自分は何ももっていないのだ。

空っぽな心を持つ私……。

そんな人間をいつたい誰が好きになるのだろうか？

私は少し笑って立てた膝に顔を伏せる。

突然の異世界に飛ばされてもそんなに驚かなかったのは、驚けるほど気持ちに余裕がなかったからだ。

自分のことだけで精一杯で、心の中は空虚だった。

時々、このままこの世界にいてもいいんじゃないかって思う。

ジエスの妻になって大切にされることがひどく魅力的に見える。でもジエスが向けてくれる気持ちはいつまで続くのだろうか？

私はジエスを信じる事が出来ないのだ。

心変わりにもう傷つきたくはない。

闇はいつまでも続く。

夜明けはいつ来るのだろうか……。

旅を始めて13日目。

夕暮れに染まった空の下、目の前には黒い煙をくすぶらせ焼け落ちた町が広がっていた。

その惨状に唾然としてしまう。

「な……」

「……ワカナ、急いでここを離れましょう」

「ええ？」

驚いているうちに馬が反転し、ジエスが走り出す。

「ちょ……」

どうしたのかと聞こうとしたとたん、すぐ目の前を何かが通っていた。

いったい何なのかと飛んでいった方向を見て絶句してしまう。

地面に矢が突き刺さっていた。

ジエスがそれを見てすぐに呪文のようなものを唱える。

すると、また飛んできた矢が何か見えない壁に阻まれるように、何も無いところでぶつかりそのまま下に落下した。

「まずい！」

それだけ言うとジエスは私の後ろに飛び乗ってきた。

「馬の首にしっかり捕まっけていてください！」

「え？ あ、はい！」

馬がすごい勢いで走り出す。

ジエスに言われた通り、慌てて馬の首にしっかりと捕まった。後ろでジエスがまた呪文のようなものを唱えはじめ。

うつすらと開いていた視界に鎧の様なものを着ている男が数人こちち近づいてくるのが目に入ってきた。

鎧？

もしかして戦争している人達？

青い炎が私の頭上からその男達の方に飛ぶ。

炎は地面に落ちると一気に燃え上がった。

「ワカナ、目を閉じてください！」

急いで目を閉じると、まぶた越しに視界が突然真っ白になる。

さっきからいったい何が起きてるの？

しばらく馬に揺られ、どれだけ経った頃だろう。

やっと馬が止まった。

「ここまでくればもう大丈夫でしょう」

「もつ目を開けてもいい？」

「ええ」

おそろおそろ目を開けて後ろにいたジエスに振り向くと、ジエスに後ろから抱きしめられた。

恥ずかしかったけれど、今はジエスの体温にほっとしてしまふ。

「怖かったですでしょう？ 怪我はありませんか？」

「大丈夫、怪我はないけど……。今の……。何？」

「略奪者です」

「略奪者？」

「ええ、戦場から逃げて盗賊に身を落とした者達です」

ジエスは私を放すと馬から下りて歩き出した。

「軍にいれば食料などの配給には困りませんが、逃げれば当然配給を受けられなくなる。食べ物があれば生きていけない。脱走兵はあんなふうに村や町を襲って略奪するそうです」

「……」

さつき見た焼けた町が思い出される。

あんなに大きな街1つが略奪者によって破壊されるのだ。

「そんな人達から、どうやって逃げたの？」

「もちろん魔法です。私はエルフ族ですから魔法が使えます」

「……あの青い炎とか光とか？」

「ええ、私は光と闇の両方の魔法が使えますから」

さすがファンタジーな世界だ。

魔法まであるとは……。

ジエスが魔法を使えて良かった。

私はジエスに助けてもらってばかりだ。
もしジエスがいなければ、私も略奪対象になっただろう。

「これからどうするの？」

「そうですね……。町1つが破壊されるほど略奪者がいるというこ
とは、戦争の軍配はあまり思わしくないのかもしれませんが。少し遠
回りな上に危険になるかもしれませんがもう少し上の大きな街道に
出た方が逆に安全かもしれませんね」

少し考えながらジエスは道を外れていく。

「大丈夫、ワカナの事は私の命に代えても傷1つつけさせたりはし
ない。私が必ず守りますから」

「うん……。ありがとう」

情けないが今はジエスに守ってもらうしかない。

私に出来ることはジエスの邪魔にならないことだ。

近くで戦争が起きている。

それをやっとな実感した出来事だった。

第7話(後書き)

(2011/10/14修正)

第8話（ジェス視点）

星が空を埋め尽くし、虫達が歌を唄う夜。

柔らかな草の上、若菜が私のすぐそばで小さく丸まって寝ている。

眠っていることをいいことに自分から若菜の側に近づいたのだ。

仕方ないとは言え、安全である主要街道を進むことにしたおかげで街道を外れ若菜に野宿させるはめになるとは……。

森から出て街道を通っていけば普通宿には困らない。

しかし、この国は戦争をしており、治安はどんどん悪くなっていた。

脱走兵が集まり、盗賊となって村や町を襲う。

まさか街道沿いにある町一つを破壊するほど組織が大きくなっていくとは思わなかった。

それほど脱走するものが多くなっているのだろう。

たぶん、この国は戦に負ける。

俺としてはそれでもかまわなかった。

神の森にいる限り、身の安全は保障されているようなものだ。

だが、今は安全な森を出ている。

自分の身は自分で守らなければならない。

しかも今は若菜までいる。

若菜だけは守らなければ……。

俺は腕の中にいる若菜をそっと抱きしめた。

柔らかな感触、甘い香りを鼻から吸うとクラクラしてしまう。

人の温かな温もり。

15歳の時にアンネが世界からいなくなってから久しぶりの温もりだ。

草の上に広がる若菜の黒髪に触れる。

今は閉じている瞳も黒だ。

自分が欲しかった色。

この色があれば自分はダークエルフとして生きていくことが容易だった。

だがそうすれば俺はアンネと暮らすことはなかっただろう。

この世界で名を轟かせていた魔術師、アンネローゼ・プレシユオン。

魔力をほぼ使い果たし、人の巡らす策略に疲れていた。

俺は彼女に拾われ、彼女からさまざまな知識を得、深い愛情を注がれ育ててもらった。

アンネがいなければ俺はどんなふうに育っていたのだろうか？

いや、生きてはいまい。

ありがたいのはアンネのおかげで自分は幸せだったと言う事だ。

適当な草むらに自分を捨てた所をアンネが見ていて、母親を引き止めて話を聞き出しアンネは俺を引き取ることにしたのだ。

アンネは最後までそのことを黙っていたが、どうしても事実が知りたくて水鏡で過去を覗いて事実を知った。

正直、真実に傷つきはしたが、アンネの深い愛情のおかげですぐに癒された。

ただ、アンネがいなくなってから孤独は辛かった。

自分はエルフ族なのにどのエルフ族にも受け入れてはもらえない。父と母の種族が違うというだけで……。

エルフ族の2大頂点の種族、ハイエルフとダークエルフの特徴を見事に受け継いだ両方の容姿。

光と闇、そしてアンネに教わった魔術。

望まぬ運命。

孤独な日々の中、色々なことを見せてくれる水鏡のおかげで少しだけ気が紛れ辛くはなかった。

そして今は若菜がいてくれる。

若菜がいてくれるおかげで寂しさはない。

「すー、すー」

「え？」

突然聞こえて来た声に視線を落とすと、若菜の口から漏れ出てる寝息だった。

「ぷっ……可愛い寝息」

あまりにも可愛らしい寝息に、起こさないようにそっと若菜の額にキスする。

平原で寝ていた時と同じ子供みたいなあどけない寝顔。

あの時はあまりにも可愛くてついキスしてしまった。

本人が嫌がられて、許可なく勝手にキスすることが出来なくなっただのが残念だ。

それに若菜の唇にキスするとあまりにも気持ち良過ぎてもつと欲しくなってしまう。

こうしてずっと一緒にいてくれたらいい。

若菜にはたくさん笑って幸せになって欲しい。

若菜が元の世界に還りたいと望むなら必ず還そう。

けれど、もう少しだけ一緒にいたい。

いつだって望みは些細なものだが勝手な望みだ。

「好きです。貴女が誰を愛していても、俺には貴女だけ……」

もう一度額にキスを落とせば若菜が身じろぎする。

さらさらと風が吹いて若菜の前髪を揺らす。

若菜の黒髪に混じって自分の銀の髪が月の光を受けて反射する。

自分の褐色の肌とは違う若菜の白い肌。

何もかもが自分とは正反対だ。

可愛くて美しい存在。

一度でもいいから若菜が自分のモノになるなら、命すら引き換え
てもかまわない。

叶わぬ望みを持つということがどれほど切なく焦燥感を生み出す
か初めて知った。

欲しいものは手に入らない。

それゆえに切望することをやめられないのかもしれない……。。

第8話(ジエス視点)(後書き)

(2011/10/14修正)

第9話

ジェスに連れられ街道を進み、次の町へ入ろうとしたけれど、そこは脱走した兵士達が党を組んで略奪の限りを言い破壊した町の残骸が広がっていた。

私達もその残党に襲われたけれど、ジェスの魔法のおかげで怪我1つしないですんだ。

町1つを破壊するほどの集団にジェスは残党のいない公益街道の方を回って進むことにしたんだけど、泊まる予定だった町が破壊されてしまったので、次の町まで野宿することになった。

夕食は干した携帯食。

味は薄味で味気なかったけれど、わりと楽しく食事出来た。全部ジェスのおかげだ。

夜は草むらをベッドにしてそのまま眠った。

仰向けに寝転ぶと視界いっぱい星で占められる。

空に月はないけれど、この世界には星があった。

星座のことを聞いてみたけど、さすがに星座はないらしい。

温暖な気候なので野宿も苦痛じゃなかった。

逆に新鮮だったくらいだ。

ジェスの穏やかな声。

無駄のないゆっくりとした動作。

まだ心を許したわけではないけどジェスは一緒にいても安心出来る。

私が嫌がることはけしてしない。
けれど、会ったばかりの私になぜここまでしてくれるのかわからないのでは信じることはできないだろう。

人を信じることが出来なくなった自分が醜くて、ジェスが寝る支度をするのに後ろを向いた時、手をきつく握りしめる。

強くなりたい……。

誰に何をされても揺るがない自分に……。

「今日はなんか薄暗いね？」

「ああ、もうすぐ雨が降るんですよ」

そう言われて空を見るけど、今日は雲一つない晴天だ。

ただ、青空なのに光が届かないかのように薄暗い。

視覚では晴れなのに、感覚では曇りのようなファジーな感覚に捕らわれるのだ。

「こんなに天気なのに雨？」

「ええ、水の精霊が騒いでますし、薄暗くなりましたから……」

明るいのにな何故か薄暗く見える。

お天気雨のようなものなのかな？

そう思って空を見上げていると、ぽつぽつと雨が降り出した。

「あ、雨……」

「降り出しましたね。これはずいぶん振りそうです」

ジェスが荷物の中から大きな布を出して私の上に広げた。

そして何かの呪文を唱える。

「何？」

「濡れないように布に呪文をかけました」

「あ、ありがとう」

ふと、自分も魔法が使えたらジエスがもつと楽になるのではないかと思つた。

「ねージエス、魔法つて私にも使えないかな？」

「残念ですがワカナには魔力がないようです」

「あーそう……」

魔法が使えないとはすごく残念だ。

ジエスみたたくちゃちゃつと使つてみたかつたな。

がっかりしている私に馬の手綱を引いてるジエスがくすくすと笑つている。

「笑うことないじゃない。私が使えたらジエスの手伝いが出来るでしょ？」

「ふふ……私としてはワカナが魔法を使えるよりも私の妻になってくれた方が嬉しいです。妻になつてくれませんか？」

「あー、お天気雨つて楽しいね」

私の露骨なごまかしにジエスは淡く笑う。

「お天気雨ですか？」

「うん、天気に降る雨のことだよ」

「こっちでは普通、お天気に関係なく雨が降るんです」

「へー」

被っている布を少しだけ持ち上げて空を見上げる。
その空は青空だ。

いつもならこんな時、ジェスは手を繋ぎたがるけれど、今は生憎雨が降っているせいなのか何も言っていない。

手なんか繋いだら手が雨に濡れてしまう。

そう思っただけでも毎日繰り返された行為がないと物足りないような気になるのは不思議だ。

私は少しだけ苦笑して馬から下りた。

「ワカナ？ どうしましたか？」

いきなり私が馬から降りたせいでジェスが心配そうに私を見る。
もちろんフードのせいでジェスの瞳は見えないが顔が向けられているので見ていることはわかった。
私はさっさとジェスの横に並んだ。

「はい」

そう言っただけで私は自分の手をジェスに差し出す。

「え？」

「手を、繋ぐんでしょ？」

「ワカナ……」

ジェスがすごく嬉しそうに笑う。

少しだけ躊躇ってから私の手が握られる。

「温かい……ですね」
「うん」

旅を始めて17日目。

初めて私は自分の意志で自分からジエスと手を繋いだ。

第9話(後書き)

(2011/10/14修正)

第10話

公益用の大きな街道に入り、道を進む。

道は前に歩いていたような街道とは比べ物にならないほど広い。人通りも活発でたくさん荷車などが行き交っている。

ただ戦争が起きているせいなのか、道を行く人の表情は暗い。

「……思わしくありませんね」

「何が？」

「近くで戦闘があったのかもしれない。こっちへ回るのは間違いだったのか……」

「え？」

ジェスに言われてよく見てみれば、怪我をしてる人が時々見られた。

通っていく荷車の中で、ひととき大きな荷車が通る。

中の荷は軍への供給品らしい。

「これだけの人が行き交っているのなら大丈夫だとは思いますが

……町に着いたら情報を集めましょう」

「そんなに心配？」

「ええ、多少離れているからと安心して戦火に巻き込まれることがあります。ここは慎重に行動した方がいい」

唯一見えるジェスの唇が堅く引き結ばれる。

そんな様子に不安を覚えてしまう。

陽が暮れる前に町に着き宿を取ると、ジェスはさっそく情報集め

始めた。

ジエスはマントを脱ぐことが出来ないので、私がジエスに言われた通りのことを人に聞く。

集めた話ではここから北に18キロ先くらいで一昨日戦闘があったらしい。

戦争はバルト国の方が劣勢で、戦場は国境を越えてバルト国内にまで及び始めているらしかった。

「まずいですね……。いくらここから北の方向だといえ、いつ南下してくるか……。明日は出来るだけ早く出発しましょう。出来るだけここから早く離れた方がいい」

「うん」

「もしかしたら、明日、次の町を通ってその先の町まで強行突破するかもしれません。今日は早く休んでください」

言われた通り、早めの食事を済ませすぐに床についた。

無理に眠らなくても早く眠れるように習慣がついてきたのか、ベッドに横になったとたんすぐに眠りに落ちていった。

何かを叩くような音に目が醒める。

その音がドアを叩く音だと理解してベッドから飛び起きた。

「ジエス？」

「ワカナ、今すぐ出る準備をしてください！」

ジエスの切羽詰まったような様子に慌てる。

外から何人かの悲鳴が聞こえ、私は慌てて窓に近寄ってその扉を開いた。

空は夜だというのに所々赤く染まり、黒煙が立ち上る。

「どうやら、軍の物資などがこの町に保管されていたようで、リキシス軍が補給路を断とうと町に侵入してきたようです。軍もそのことを察知して自衛の為に町に入り込み、もうここは戦場になります」

「今着替える！」

ジエスは私の着替えを見ないようにと部屋の外に出てくれた。待っていてくれる間、急いで着替えて荷物をまとめる。

「お待ちせ！」

「急ぎましょう」

宿を出て隣の宿舎に入る。

ジエスは手早く馬の綱を外し荷物をくくりつけた。その間、人々の悲鳴が響く。

町の地理はあまりわからないが、悲鳴はそれほど遠くないような気がする。

「ワカナ、乗って！」

「うん！」

馬上からジエスに差し出された手に捕まり馬に乗る。

もうこっちでも焼けたような匂いが漂いはじめていた。

ジエスは馬を走らせる。

他の人も町の外へ出ようとしているらしく、みんな右往左往していた。

町の外へあと少しというところで、いきなり数人の鎧を着た人がばらばらと目の前に出てきた。

手には剣が握られている。

鎧が以前見た盗賊化した兵士の物とは違っていたので、目の前にいるのがリキシス軍の兵士だとわかった。

「若菜、手綱を持っていてください！ 今馬を失うわけにはいきません」

まるで投げ捨てるかのようにジェスが手綱を手放し、慌てて手綱を掴む。

真っ直ぐ走らせるくらいは旅の中で覚えた。

少し不安はあるものの、しっかりと手綱を操る。

ジェスは腰を浮かせて呪文を唱え出す。

とたん、頭上を稲光が走り、兵士へと向かっていった。

ズドーンとすさまじい音をさせて兵士達の上に雷みたいなのが落ちる。

兵士はそのことに驚いたのか、左右に分かれた。

その中央を馬で突き切って行く。

突破出来たと思ったとたん、横から何かが飛んできて馬上から吹っ飛んだ。

地面に叩きつけられるようなことはなかったし怪我もない。

しかし、髪からぼたぼたと水滴が落ちていた。

体も全身びしょ濡れだ。

なんでこんなに濡れているの？

驚く私の目の前にジェスが立つ。

「若菜、馬を！」

少し先で、馬が立っていた。
操る人が急にいなくなつて立ち止まつたらしい。

急いで馬に近づこうとして目の前を何かが横切つた。
その後だけ地面が濡れている。

「くっ！」

ジェスの苦しそうな声が聞こえ、その先を見れば、マントを着た
2人が立っていた。

2人の手から渦まいた水の塊がこつちへ襲ってくる。
それをジェスが見えない壁で阻んでいた。
でも、その唇は苦しそうに歪められている。

私は急いで馬に向かう。

あと少しで手綱をつかめるといふ時、誰かが私の手を掴んだ。

「え？」

視線を上げて私の腕を掴んでいる人を見ればバルト軍の兵士だ。
なぜバルト軍の兵士が？

音が止み、振り向くとジェスと戦っていた2人の人が倒れていた。
倒れた男達のそばにはバルト軍の兵士が数人いて、その人達が倒
したらしい。

「ジェス！」

心配になってジェスの側に行こうとした時だった。

腕に激痛が走って見れば私の腕が少し切られている。側にいる男がナイフを持っていた。

「なに？」

もしかしてこの男に切られた？

驚いているとジェスが私と男の間に割り込んできた。

「なんの用です？」

「用？ ああ、貴様は魔法を使えるのだろう。町を守る協力をしてくれよ」

「私は兵士ではありません。そのような義務はない」

男の言葉にジェスはきつぱりと断る。

けれど、男は見下すように笑った。

「このナイフには特別な毒が塗ってある。その娘の命を助けたいなら言うことを聞くしかないな」

「何？」

ジェスが男の言葉を聞いて私に振り向く。

私の腕に男には切られた傷があるのをジェスは確認すると唇を噛んだ。

「解毒剤は野営テントだ」

「……」

「迷っている時間はないぞ」

「っ！……わかった」

「よし。エド！ この娘をテントに連れて行き、解毒剤を飲ませる！」

「はっ！」

近くにいた男が返事をし、近づいてくる。

いきなりこんな所でジエスと離れることになるなんて思わなくて不安がこみ上げてきた。

すぐるような気持ちでジエスを見る。

「ジエス……」

不安になってジエスを呼ぶと、そつと手が握られた。

ジエスの顔が近づいてきて、頬に唇が触れる。

「こんなことになってしまって申し訳ありません。迎えに行くまで待っていてください」

「……ジエス」

エドと呼ばれた男に引つ張られ、馬に乗せられる。

何か寒気がするし、汗も出てきた。

「いそげ！」

「はっ！」

男の言葉が聞こえ、馬が走り出す。

ジエスの姿が少しずつ離れていく。

そこで私の記憶は途切れた。

第10話(後書き)

(2011/10/14修正)

第11話（ジェス視点）

足元に転がるリキシス軍の兵士。

目の前にいるのはバルト軍の兵士。

命を狙ってきたのはリキシス軍の兵士だが、力があれば簡単に退けられる。

しかしバルト軍の兵士は若菜を盾に俺に協力という名の利用をもくろんだ。

あれほど若菜だけは傷1つつけるまいと誓っていたながら、俺は若菜を守れなかった。

その不甲斐なさの結果はこれだ。

ナイフに塗られていたという毒は、普通の毒消しは通用しないだろう。

若菜を野営テントに連れて行くように命令された兵士の慌てようを考えれば、即効性があるのかもしれない。

俺は若菜を切りつけた隊長格の兵士を睨みつける。

「もし若菜が命を落とすようなことになれば俺がお前ら全員の命で購わせる……」

「……おお、怖いね。まあ心配はない。テントはすぐ近くだ。熱は出るだろうが命に支障はないと保障する」

「……………」
「リキシス軍は魔道師が多くてね。少し苦しいんだ。協力してもらえぬなら約束は守るよ」

兜をつけているので顔はわからないが、ずいぶん軽そうな印象の話し方をする男だ。

とても信頼など出来ないが、若菜が相手の手に捕まっている以上、協力するしかない。

「それで？ 何をすればいい。さっさと言え」

「はいはい、それじゃ……」

フードマントを被っている上に、夜中だ。

あちらこちらで燃える炎が明かりとなっているが、この薄暗さでは俺の正体まではわからないだろう。

さっさと終わらせてしまわなければ……。

それから3時間後。

あっさりと決着がついた。

通りには累々と人が倒れている。

起き上がらないことから、すでに命は消えている者達だろう。

倒れた者の殆どは鎧をつけていない。

巻き込まれたこの町の住民や、旅の者ばかりが命を落としている。

町の損害は酷いものだったが、軍の支給品だけは守れたらしい。

国民を守るべき立場の軍が、町の人を犠牲にしてまで自分達の物資は守るとは見下げ果てた忠誠心だ。

「よお、お疲れさん。助かったぜ」

「……」

「闇の魔道師とは珍しいな。どうだ？ このまま軍に協力しないか

？」

「断る」

あと1刻もすれば夜が明け始める。
すぐにでも若菜の無事を確認したかった。

「若菜はどこだ？」

「ああ……。それじゃテントへ案内するよ。ウドク！ 後のことは任せる」

「はい！」

男は近くにいた自分の部下に後を任せてみずからテントに案内するらしい。

俺は歩き出した男について行く。

男は少し後ろを歩く俺に、肩越しに振り返る。

「名前は？」

「名乗る必要はない」

「素っ気ないねー」

その後は何を言われても無視した。

町外れに着き、繋いでおいた自分の馬にまたがると、いつの間にか男も馬に乗っている。

自分の馬も近くに繋いでいたらしい。

「なあ、考えなおさないか？ 軍に協力したら大抵の褒美は望めるぞ？」

「俺は若菜の護衛だ。戦争になど参加しない」

「護衛？ あのお嬢ちゃんのこと？ どこへ行くんだ？」

「話す必要はない」

詮索好きの男をあしらっているうちに軍のテントらしいものが見

えた。

テントの数がそれほどないことから、物資を守る隊として野営していたのだろう。

「ここだ」

奥まった場所の小さなテントの前で男が馬を降りた。俺もすぐに馬から降りて男に続きテントに入る。

中は医師らしい男と、ベッドに横になっている若菜がいた。顔は赤く、汗をかいているが生きているようだ。

「解毒剤は飲ませたが、動けるようになるには1日かかる」「そうか」

俺は若菜に近づき、抱き上げようとする。

「ちょっと待て！ 何してる？」「ここから出て行く」「お嬢ちゃんが元気になるまでここにいればいいだろう」「断る」

協力させる為に無関係の女性を毒の塗ったナイフで切りつけるような人間がいる所などに若菜を置いておきたくはない。

若菜を抱き上げたたん、俺を止めようとした男がフードマントを掴んで強く引っ張った。

その衝撃でフードが頭から落ちる。

「なっ！」

男が驚いたように止まった。
テントの中央にあった光に俺の姿が晒される。

しまった。
姿が見られた！

慌ててテントから出ようとして、またマントが引つ張られる。

「待ってください。あと1回薬を飲ませないとだめなんです！」

そう言って医師らしい男に止められた。

「薬？」

「中和薬を飲ませないと、残った毒が筋肉を犯し体に影響が残ります」

「……では薬をくれ」

「だめだっ！」

俺の言葉に答えたのは医師ではなく男の方だった。

「おいおい、こんな幸運なんて本当にあるもんなんだ……。闇の魔術師だと思っていたヤツがまさかダークエルフだとは……。しかも光の守護まで持つエルフなんてな」

かぶっている兜のせいで表情はあまりハッキリとは判らないが、男は欲望にまみれた笑みを浮かべている。

「いいかフレッド、薬を渡すな！もし薬を渡せば王によってお前の家族全員皆殺しにされるぞ！」

「へ？」

「わからないのか？ ハイエルフの力も持つダークエルフだぞ？」

男は俺の価値がわかっていのに医師はわからなかったようだ。戸惑いの視線を向けてくる。

「こいつ1人いれば魔道師50人以上の働きをする。この戦争にこいつを使えば戦いに勝てるんだよ！」

「あ……」

言いたいことがわかったのか、医師の顔が驚愕の表情に変わった。

「無理やり協力させておいて約束を違えるつもりか？」

「うるせえ！ 話の次元が違うんだよ。ただの魔道師ならちゃんと約束を守ったさ。だが、お宝を目の前に見すみす逃がすような真似をしたら、俺が王に首を刎ねられちまうだろ！」

「……」

一番恐れていた事態になってしまった。

しかも逃げたくても若菜がこれでは逃げられない。

姿を見られずに薬さえ手に入れば問題はなかったはずなのに……。

「そのお嬢ちゃんを助けたいなら言うこと聞いてもらおうか？」

男の欲に眩み醜く歪んだ顔が疎ましい。

普通のエルフなら人間と共存している。

だが、高位の存在であるハイエルフとダークエルフは他のエルフとは比べ物にならないほどの魔力を有し滅多な事では人には関わらない。

自分達の力が人間の欲望を煽り立てることを知っているからだ。

「この俺を戦争の道具にするつもりか？」

「そのお嬢ちゃんが大切なら俺達の言うことを聞くんだな」

「薬を投与せずに彼女を死なせれば俺は報復するぞ……」

「薬はちゃんと投与するさ。娘を縛り付ける方法ならいくらでもあるからな」

「……」

若菜を人質に取られれば俺は言うことを聞くしなくなる。

男の言葉に歯軋りするしかない。

「至宝だ。俺は至宝を手に入れたんだ！」

浮かれる男と俺を、医師が困ったように何度も見比べていた。

若菜だけは傷つけるわけにはいかない。

不本意だが、若菜を取り戻すまでは言いなりになるしかないだろう。

人間の欲深さと身勝手さに傷ついていたアンネが思い出される。

若菜をアンネのように傷つけさせたりはしない。

それなら俺が……。

第11話（ジェス視点）（後書き）

若菜が気絶しちゃっているの、視点はジェスにしました。
書きたいものが書けるってホント楽しいです♡

第12話（ジェス視点）

若菜を盾にされ、俺は捕まった。自分だけなら逃げられるが、若菜の命を握られている。逃げることは出来ない。

若菜に必ず中和薬を飲ませると約束させ、俺は男に手足を拘束されて本拠地にある一際大きなテントに連れて来られた。

室内は高級な絨毯が敷きつめられ、戦地にはふさわしくないような豪華な家具までが置かれている。

美しい装飾の長椅子の後ろにはバルト国の旗と飾り剣が飾られていた。

このテントの所有者など考えなくてもわかる。

バルト国の最高権力者、オーガスト・ホリス・バルト国王陛下だ。

「そこに座れ」

護衛の男に肩を押される。

俺は黙って言われた通り地べたに座る。

座った場所は無駄に豪華な1つの椅子の前。

これからどうなるのかだいたい予想はつく。

自分のことはもう諦めてはいるが、残してきた若菜の事だけが心配だ。

しばらく待っていると、入り口が騒がしくなった。

「くだらぬ！ 我にそのような戯言を信じよと申すか」

「お願いです、陛下。まずは本人を見てくださいますか！」

俺をここまで連れて来た男の声が響く。

今は信じてもらえずとも、俺を見れば一目瞭然だ。

「ハイエルフとダークエルフの子など生まれるわけが……」

布擦れの音がして声が止まった。

俺はゆっくりと振り向く。

無駄にあがいた所で意味がないからだ。

「……」

中肉中背。

緋色のマントと銀の鎧を身に着けた白髪交じりの50歳近い男が驚いたように俺を見ていた。

しばらく呆然と俺を見ていたが、やっと正気に戻ったのだろう。

嬉しそうな笑みを浮かべ俺に近づいてきた。

「なんと美しい……。まさに至宝」

手が伸ばされ、俺の髪がひと房すくわれる。

「銀の髪。金の瞳。褐色の肌……。まさに光と闇の結晶……」

顔にまで手を伸ばされ、さっと避ける。

そのとたん、国王の顔が醜くゆがむ。

王である自分を避けたことに腹を立てているのだ。

髪を引っ張られ床に倒される。

「くっ！」

「名はなんと言つ？」

支配者ゆえの傲慢さで、他人を地位の力で支配しようとする。
地位以外の力などないくせに。

「名は？」

若菜の命がかかっている。

あまり抵抗は出来ない。

「ジェスディラッド・リンディール……」

「ジェスディラッドか。よし、我に仕えることを許す！」

「……」

まるで俺が王に仕えたがっているかのような言葉に笑ってしまう。
手足を束縛されている者が喜んで仕えたがっているように見える
のだろうか？

もしそうならなんて都合のいい思考をしているんだ。

……いや、この王はそういう男だ。

自分の思う通りのことを思いこむ。

俺のリンディールはアンネが娘のリンディールから取ってつけて
くれた名だ。

アンネはこの男の元専属魔術師だった。

王宮のくだらない策略や欲望に我慢してきたのも全て、アンネの一人娘の為だった。

アンネの娘、フロイライン・リンデールは、フレドリック・リンデール公爵に嫁いだ。

しかし、この身勝手な王によって無理やり性的な暴行を受け、自ら命を絶った。

アンネは愛する一人娘を失い、何もかも捨てて神の森にやって来たのだ。

この男はフロイライン・リンデールがアンネローゼ・プレシユオンの一人娘だとわかっていて手を出した。

権力を振りかざす愚かな王なのだ。

しかしどんなに低俗な王であろうと、若菜の命には代えられない。今は黙って従うしかないのだ。

「一緒にいた娘を捕らえているとか言っていたな？」

「はっ！」

「ではその娘に束縛の王冠をつけてやれ」

「かしこまりました」

やはり束縛の王冠か……。

束縛の王冠とは、頭飾りに魔法をかけ、それをつけている者をいつでも殺すことの出来る魔法だ。

俺が言うことを聞かなければ若菜は頭を潰されて殺される。

「言われたことはすべてする。その代わりに、束縛の王冠を着けさせるなら彼女とは自由に会わせて下さい」

「なぜ？」

「俺はすでに交わした約束を破られている。彼女が生きているか毎日確認したい」

「……その娘がそんなに大切か？」

「俺は彼女に責任があるんです」

「ふむ……。まあ、いいだろう。好きにするがいい」

「陛下！」

「かまわん」

止める臣下に手をあげて制止する。

要求を聞き入れる余裕があるように見せたいのだろう。

王は簡単に俺の要求を飲んだ。

これで若菜のことを確認することが出来る。
殺されていることに気づかないまま利用され続けるなんてごめんだ。

それにずっと若菜と一緒にいたい……。

「部屋を1つ与えてやれ。娘と同じ部屋でかまわん。どうせ束縛の王冠を着けていては逃げられぬのだからな」

「我が君のお望みのままに……」

近くにいた男はそう言って頭を下げ、テントから出て行った。
別の男が一步前に入る。

「その者はいかがいたしましたでしょうか？」

「しばらくはこのままでよい」

「このままとは？」

王の言葉の意味がわからなかったのか、男が怪訝そうに俺を見る。

「これだけの美しい宝石だ。しばらく楽しみたい」

「……かしこまりました」

王の言葉にぞっとする。

確か王は無類の女好きなはずだ。

よもや俺に興味はないはず。

王は楽しそうに俺の髪に触れた……。

第12話（ジェス視点）（後書き）

BL展開はないのでご安心ください。

第13話

目が醒めると視界がにじんでいた。

何度か瞬きしてみたけれど、まったく視界がクリアにならない。

いったいどうしたのかと記憶を探り、自分が毒のついたナイフで斬られ気絶したことを思い出した。

「私……」

「あ、目が醒めましたか？」

ジエスではない声が聞こえて怖くなる。

「誰？」

クリアーにならない視界を向けると白い服を着ているらしい男の人がすぐ横にいた。

「私は医師のフレッド・オリヴァと申します。頭痛や吐き気などはありませんか？」

「お医者さん？」

「はい」

医者と聞いて少しだけほっとする。

少しだけ警戒しながら辺りを見回してみるが、他に人影はなかった。

「あの……ジエスは？」

「ああ、お連れの人ですね。もうすぐ戻られますよ」

その言葉を聞いて、体の力がゆっくりと抜ける。
今はちよつとだけ離れていて、戻って来てくれると聞いただけで
安心した。

「それで頭痛と吐き気は？」

「あ、ないです。ただ、視界が何かぼやけててよく見えなくて……」
「熱がかなり出ましたし、まだ体内に残った毒が中和されていない
せいですね。問題はありません。明日くらいには良くなりますよ」

少しだけ体を起こされ、何かを手渡される。

「薬です。念の為にもう1回中和薬を飲んでおきましょう」

水をもらって粉の薬を飲む。

すごく苦い……。

「ちよつと待ってくださいね」

そう言ってフレッドは少し私から離れて、すぐに戻って来た。

「見張りがいないようなので、静かに聞いていてください。解毒剤
を飲ませる為に貴女は町の近くの野営テントに連れてこられました。
貴女の連れの方は貴女の命を盾に町を守る為の協力を余儀なくさ
れたようです。最初はグレッグ隊長も約束を守るつもりだったんだ
と思います。ですが、運悪く彼のフードが外れてしまって……。彼
の姿を見たグレッグ隊長は王にそのことを報告しました。彼と貴女
を王の

いる拠点テントまで連れて来て彼を王に会わせただのです。当然貴女の命を盾にされ彼は王の物になりました」

「え？」

「貴女の頭にある頭飾りには魔法がかかっています、無理にそれを外そうとしたり、王の命令に背いたりすればその輪が魔法で縮まり、貴女の頭は……」

そこまで言われて慌てて頭を確認する。

確かに頭には何か輪のようなものがはめられていた。

「やだ。何これ？ 無理に外しちゃだめって外せないんですか？」

「ええ、魔法をかけた魔術師が魔法を解くか、またはその者が死ぬば外せませんがそれ以外では外せない禁呪の魔法なのです」

「そんな……」

「彼が逃げたり、王の命令に従わない場合、貴女は殺されるでしょう」

「……」

言われた言葉に理解力がついていかない。

私が死ぬ？

「何でそんなことに？」

「彼はハイエルフとダークエルフの力を継いだ稀なる存在なのです。その上あの美しだ。彼を見れば誰だって彼の中の強大な魔力がわかる」

「見ただけでわかるものなんですか？」

「え？ ええ。あのように美しいんですよ？ 誰だって彼の力はわかる」

「えっと……美しいと力が強い……んですか？」

「当然です。彼はエルフ族ですよ。外見と力の大きさは比例します

「からね。美しければ美しいほど力がある証です」

ジェスの容姿がそういうことを表すのだと聞いて驚いてしまう。

力の大きさと美しさが比例する？

じゃあ、ジェスの魔力はすごいってこと？

「彼1人いれば魔術師50人……いいえ、多分80人いるようなものだ。魔術師が少なくて押されている我が軍に彼がいれば戦争に勝てる……」

「そんな……」

「まさに生きる至宝です」

ジェスが以前、自分は至宝だから森から出てはいけないのだと言っていたことを思い出す。

旅をしている時も、ひたすら容姿を隠していたのは自分の姿を見られなくなかったからだ。

それなのに私は自分の都合でジェスを森から出し、自分の容姿について言うジェスの言葉をナルシストだと思っていた。

ジェスの容姿は鑑賞用などで楽しむ程度の危険しかないと思っていたのだ。

「うぐっ！」

いきなり吐き気がして慌てて口を押さえる。

「大丈夫ですか？ もう薬を飲んだのですから横になってください」

「私……何も知らなかった……」

体がかたがたと震えだす。
フレッドさんはジェスが王の物になったと言っていた。
それはつまり、ジェスは戦争に利用されるということだ。

「どうしよう……」

震えが止まらない。

ジェスは私の命を盾に取られて言うことを聞くと……。
私の存在がジェスに人殺しをさせる。

「ごめんなさい。……ごめん……ごめんなさい、ジェス……」
「落ち着いてください」

ジェスを自由にしてあげたくても自分が死ぬことは出来ない。
ジェスは私の為にたくさんのことをしてくれたのに、自ら死ぬのは怖いのだ。

「ワカナ？」

布擦れの音がしたかと思うと、聞き覚えのある声が聞こえた。

「ジェス？」

「どうしたんです？ 何かされたのですか！」

音もなく素早くフレッドさんに近づく。
それだけはかすむ視界でもわかる。

「ちがつ……ぐっ！」

フレッドさんの苦しそうな声が聞こえて慌てた。

「ジエス？ 何してるの？ 私は何もされてないよ？」

慌てて起き上がって手を伸ばすけれど、かすんでいる視界では遠近感もわからない。

伸ばした手をさ迷わせているとジエスがその手を握ってくれた。

「もしかして目が見えてないんですか？」

「一過性なものです。まだ毒が中和されていないせいで目がかすんでいるだけです。今薬を飲ませたので明日か明後日には直ります」

フレッドさんは少し苦しそうな声のまま、ちゃんとジエスに私の説明をしてくれた。

「大丈夫ですか？ 気分は？」

優しく手を握るジエスの表情はぼやけてわからないけれど、常に着ていたフードマントはつけていなかった。

あんなに暑がっていても脱がなかったのに、やっぱり姿を見られたから脱いだのだろう。

「ごめんなさい……」

「急に謝ったりしてどうしたんです？」

「私のせいで王様の命令を聞かなくちゃいけないんでしょう？」
「……」

後ろにいたフレッドさんに振り向いたのだろう。

怯えたような小さな悲鳴が聞こえた。

私はジェスの意識を戻す為に、握られた手を引く。

「フレッドさんを責めないで」

「私はそんなこと聞かせたくなかった……」

「でも私は事実を知れて良かったって思ってる」

私はジェスの手をもう一度引き自分の体を少しでも前にしてジェスにキスした。

視界がかすんでいるせいでキスは唇から少しだけ横にずれてしまったけれど……。

「ごめんなさいとしか言えなくてごめんなさい。ジェスに返せるものが私にはなくて、ごめんなさい……」

「ワカナ……」

掴まれていた手を持ち上げられ、手の甲にジェスがキスした。

「ワカナは何も気にすることはありません。それにここで足止めされるのも悪くないと思っていますよ」

「? どうして?」

「それだけワカナと長く一緒にいられますから」

ふっと笑っているような気配がして体が引き寄せられる。爽やかな香りがして私はジェスの胸の中にいた。

背中が優しくさすられる。

「とりあえずワカナは早く良くなってくださいね?」

「うん……」

ジェスに優しくされても、**事実**は消えない。

私は泣きたくなるのを堪えて、ぎゅっとジェスにしがみついた…。

第13話（後書き）

前の話に誤字発見、後でこっそくり直しておかなければ・・・。

第14話

テントに兵士らしい人がジエスを呼びに来て、ジエスはまたいなくなってしまうた。

残されたのは私とフレッドさんの2人。

私はぼうつとしがちな頭を必死に働かせ、どうすればいいのかわかっていた。

「ワカナさん……と彼が呼んでましたよね？」

「あ……」

フレッドさんにそう聞かれてまだ自分の名前を名乗ってなかったことに気づく。

「ワカナ・ヒビキです」

「なにやら考え込んでいるようですが、迂闊な行動はやめた方がいい」

「え？」

「彼……ジエスを苦しめることになるだけですよ」

「でも戦争に参加すると言うのは、人を殺すってことですよね？」

「……そんなことジエスにさせられない」

自分のせいでジエスを縛り付けていることが苦しい。

何とかできないかと思っているのに、フレッドさんは止めようとしている。

「無駄です。王は1度決めたことはけして翻すことをなさらない方だ。ご不興をかえばあの方は躊躇うことなく切り捨てられる」

「え？」

「貴女もジェスさんも殺されるだけです。王は自分の意に反する者を許されない」

額の上に乗っている濡れタオルをフレッドさんが新しいものに替えてくれる。

「せめて束縛の王冠がなければ逃げるチャンスはあったかもしれませんが……」

「束縛の王冠？」

「その頭のリングのことです」

そつと自分の頭についている頭飾りに触れる。

金属で出来ているようなのに、どういったわけか少しの間もなく、またすっかりと固定されているかのようにはまっている。

痛くはないが、落ち着かない。

「何でこんなことになっちゃったんだろう……」

「そうですね。ですが、運命を嘆いていても仕方ありません。ただ、未来の運命に必要な出来事の1つなのでしょう」

「未来に？」

「ええ」

ぼやける視線のせいでフレッドさんの表情はわからない。
でも優しい人のようにだ。

「私はここから北にある小さな町の町医者でした。ですがこうして捕まってしまいました」

「え？」

「私にも束縛の王冠がつけられているんですよ」

言われて見てフレッドの頭に細い何かがついているのがわかった。

「ジェスさんほどの魔力があれば束縛の王冠なんて恐ろしくはないのですが、私はただの医者です。逃げることは出来ません」

「魔力があると束縛の王冠は怖くないって？」

「魔法をかけた者より魔法力があれば、たいていかけられた魔法は解けます。だから王はジェスさんではなく貴女に束縛の王冠をつけたのですよ」

「そんな……」

ジェスだけなら逃げられる。

そうわかってても、ジェスに逃げるように言えない自分が情けない。

こんな所で殺されるなんて嫌だ。

それに1人にされるもの怖い。

ジェスは私のせいで捕まっているというのに……。

「私……どうしたら……」

「貴女の為に捕まっている彼を大切にしていればいい」

「でも……」

自分のせいでジェスが誰かを殺すのかと思うと、ジェスに申し訳ないと思うより、自分が原因になる方が怖かった。

なんて自分勝手なのだろうか。

これじゃ、誰も責められない。

「やっぱり王様に話して……」

「やめなさい。今まで見てきたが、王に意見してきた者は首を跳ねられるだけだった。余計なことはいらない方がいい」

「王様なんでしょ？」

「ジェスさんを思うのならやめた方がいい」

そうフレッドさんに言われ、何も言えなくなってしまった。

どうしたらいい？

どうしたら逃げる事が出来る？

ジェスが戻って来るまで私はそればかりを考えていた……。

次の日、目を覚ますと視界はちゃんと見えるようになっていた。まったくばやけることなくハッキリと見える。

辺りを見回すと、テントの中は私だけだ。

ジェスもフレッドさんもいないことに不安になり、ベッドから起き上がると少しだけふらふらしながらも出入り口に向かった。

そつと少しだけ布をめくって外を覗く。

外には六角形のテントがいくつもあり、鎧を着た人が数人歩いていた。

「何だ」

「きゃっ！」

突然掴んでいた布を奪われ悲鳴を上げてしまう。

目の前に鎧を着た男が立っていた。

「あの……」

「ここから出たら斬るぞ」

カチンと音がした方に視線を落とせば腰にある剣に手がかかっている。

「さっさと中に戻れ」

「……」

あまりの怖さに後ずさった。

ジェスがどこにいったのか聞きたいのに、怖くて声が出ない。

小さく震えたまま、そこから動けなくなってしまった。

どれだけそこに立っていたのだろうか、急に目の前の布が捲れ、白い服を着た人が入ってきた。

きつと彼がフレッドさんだろう。

「おや、もう立ち上がれるほど元気になったんですね」

「ふ、フレッドさん？」

「ええ、ワカナさん、おはようございます」

「おはようございます」

目の前で挨拶するフレッドさんは目の細い40代後半の落ち着いた感じの人だった。

見るからにお医者さんって感じた。

「朝食を食べる前に検査してしましましょう」

フレッドさんは質問しながら私の口の中や目をみたり色んなとこ

ろを触れる。

やっと検査が終わったらしくテーブルに食事らしいものが置かれるととうとう我慢出来なくなって質問した。

「あ……あの、ジエスは？」

「ジエスさんならもう出発されましたよ」

「え！ もう？」

「ええ、きつと今日は勝つでしょう。ここのところ負け続きで国内まで侵入を許してしまいましたからね。王は喜びになる」

「そんな……」

神の森から出たことがなかったジエス。

いきなり戦争に狩り出され、どう思っているのだろうか？

昨日の夜もろくに話さないまま眠ってしまった。

そつと手を頭のリングに伸ばす。

無理やり外そうとすれば魔法が発動し、リングが縮まって……。そう考えると手が振るえ出した。

このままリングを……。

「やめなさい。ジエスさんが悲しみます」

声がして手が止まる。

リングに触れていた手をフレッドさんが掴んでいた。

「いまさら貴女が死んでも彼が人を殺すことはもう止められない。彼は戦場に行ってしまったんですよ」

「フレッドさん……」

「もしチャンスが来て逃げられるようになった時、彼の足手まといにならないように早く元気になることです」

そう言って私の手を離すと、フレッドさんは小さなテーブルに座った。

「チャンスは必ずやって来る……」

テーブルの家に乗せた手をフレッドさんは握り締めている。彼も私と同じなのだ。

『束縛の王冠』を受けている者。

「捕まったことは運が悪かった。でもそこからどうするかを決めるのは貴女だ。座って食事を摂りなさい」

「……はい」

私は言われるまま椅子に座る。

なんとしても逃げ出さなければ……。

それには私が動けなければジエスも逃げられない。

私はスープのような味のしない食べ物に運んだ……。

第15話

大人しくベッドに横になって出入り口に視線をやる。

朝、一緒にいたフレッドさんは食事の度に顔を見せに来るもの、すぐに忙しそうにどこかへ行ってしまった。

軍医さんということで、他にも患者さんがいるらしく色々忙しいのだろう。

テントから出ることが許されない私は、テントの中でひたすらジエスが戻ってくるのを待っていた。

陽が傾き出した頃、急に外が騒がしくなった。

行き交う足音、ざわめく人の声。

行っていた人達が戻って来たのだとわかった。

一緒に行っただけのジエスも帰って来ると思うと落ち着かなくなる。

外を覗きたいのに、表には見張りがいて覗くこともできない。ジエスの姿を見えるまでは不安は募る。

しかし、いくら待ってもジエスは戻って来なかった。

気づけば外の喧騒はすっかり静かになっている。

どうして戻って来ないの？

大怪我でもした？

それともまさか……。

最悪の想像が浮かぶ。

入り口でずいぶん長いことウロウロし、とうとう我慢出来なくな
って入り口の布に手を伸ばそうとした時だった。
まだ触れていないのに布がめくられ、誰かが入ってきた。

「ジエス！」

待ち望んでいたジエスの姿を目にして私は飛びつくように抱きつ
いてしまった。

「わっ！ ワカナ？」

「なかなか戻って来ないから心配で……」
「……すみません」

謝るジエスに胸が痛む。

ジエスは何も悪くない。

それなのに謝ってくれる。

それが逆に申し訳なくて……。

「濡れていますから離れてください。これではワカナも濡れてしま
います」

そう言って私の身をそっと引き離す。

顔を上げて見れば確かに髪が濡れていた。

「汚れてしまったので体を洗ってきたんです」

今までと変わらない優しい微笑み。

でもなんとなくだけ疲れているような感じがした。

「怪我は？」

「大丈夫です。どこも怪我はしてません。……ただ魔力の使いすぎで少し疲れてしまいました」

「あ……」

そう言うとジエスはだるそうにベッドに座る。

私は急いでテーブルにあったコップに水を注いで髪を拭いているジエスに渡す。

「ありがとうございます」

差し出されたコップをジエスは微笑んで受け取りゆっくりと飲む。私はすぐにおかわりが飲めるように、ジエスの近くにあった低い棚に水入れを置く。

やる事がなくなってしまうと間が空いてしまう。

話したくても何も会話が浮かばない。

何があったのかわからない、わかりきったことなど聞けるはずもなく。そんな勇気もなかった。

「朝早く出て行って疲れてるんだよ。横になつて？」

「はい」

私の言葉に、ジエスは素直に横になった。

魔力を使うと言うことがどういふことなのか私にはわからない。

ただ、私に気遣う余裕が無いほどジエスが疲れているのだけはわかる。

私はジェスの向かい側にある自分のベットに座った。

何を話せばいいか悩んでいるうちに、ジェスの寝息が聞こえはじめたことに気づく。

すぐに寝てしまうほど疲れているのだろう。

そんなジェスに不安が募る。

上掛けもかけずに寝てしまったので、そつと上掛けをかけ、ベッドから流れて床についてしまっているジェスの長い銀髪をすくいあげベッドの上に乗せてあげた。

そのまま横に座ってジェスの寝顔を見つめる。

「ジェス……」

どうしてジェスは会った時から私を特別扱いするのだろうか？

それがどうしてもひっかかる。

優しくしてもらえるのは嬉しい。

それでもジェスが自分の身を犠牲にしてまで私を助けてくれることに納得は出来なかった……。

次の日も目が醒めると、またジェスの姿はすでにいなかった。疲れは取れたのか気になるけれど、聞く相手がいないのではどうしようもない。

体のだるさもすっかり取れて気分もいい。

運ばれて来たさつさと朝食を食べる。

一人だけの食事。

何を食べても何も味がしない。

とにかくジエスのことが心配でたまらなかったのだ。

食べ終わった頃、タイミングよくフレッドさんが来てくれた。

朝の挨拶を交わし、検診を受ける。

「今朝知り合いの兵士から聞いたのですが、昨日の戦いは圧勝だったそうですね。」

「え？」

「魔力が強いということは、魔法の及ぼす範囲が広いということですからね。ジエスさんの広範囲で攻撃出来る魔法を何度も使って圧勝だったそうですね。」

「……………」

圧勝だったと聞かされても言葉が出ない。

戦争をすれば人が傷つき死ぬ。

話を聞いて気持ちが一気に沈み込む。

ここから逃げたい。

でもどうすればいいかわからない。

泣きたい気持ちで息が苦しい……………。

でも一番苦しいのはジエスだ。

ここでじっとしているだけの私には苦しむ権利すらないだろう。

「フレッドさん、このリングに魔法をかけた人って知ってますか？」

「……王のそばにいる魔術師の中で、2人まで絞れたのですがそれ以上は……私にもわからないのです」

首を振っているフレッドさんも『束縛の王冠』を受けている。
色々調べたのかもしれない。

「誰が魔法をかけているか突き止めても無駄です。魔法を解くことを頼んだとしても聞いてくれるはずありません。王の命令に背けば自分の命が危なくなりますからね」

王のに話してもダメ。

魔法をかけた人に言ってもダメ。

ではいったいどうすればいいのだろうか。

「この国はこのままでは衰退していくだけ、だから王はリキシスの豊富な鉱山が欲しいのです。戦争に勝てると思って戦争をけしかけて蓋を開けてみればリキシスと軍事力の差があった……。王は勝つためなら何でもするでしょう」

フレッドさんはそう言いながら、表情を消した顔で出入り口を見つめている。

ジェスも私もフレッドさんも『束縛の王冠』によって無理に縛り付けられているのだ。

「……もし良ければ、フレッドさんの事少し聞かせてもらえませんか？」

「私の？」

「はい。北の方にある町の町医者だったんですよね？」

少し気持ちを変えたくて、フレッドさんに話をふる。

「私の住んでいた町は、バルト国の王都から北東に位置するピチエス地方の海に面している小さな町です。8歳になった娘と少し体の弱い妻がいます。戦争の為にピチエス地方から連れて来られた医師

は私を含めて6人……。いつの間にかここにいるのは私だけになつてしまいましたかね」

「その人達はどこにいるんですか？」

「わかりません。生きているのかどうかすらわからない……。私は妻と娘の元に帰りたい。だから言われたことをするだけです」

「……」

話を変えようと思ってフレッドさんに話しを振ったのに、結局暗い雰囲気のままになってしまった。

フレッドさんが私に色々と話してくれるのは、私が同じ境遇だから……。でも裏切る気はないとはっきり告げている。

八方塞がりな状況に気持ちが悪く。

本当にいつか逃げ出せるチャンスは来るのだろうか？

先の見えない未来に私は不安を感じるばかりだった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1885x/>

超美人さんからの求愛

2011年10月19日23時05分発行